

(論 文)

## ホームズ物語言及作曲家に見るドイルの宗教観

中西 裕

Arthur Conan Doyle's View of Religion as Seen by the Composers Mentioned  
in the Sherlock Holmes Stories

Yutaka NAKANISHI

Arthur Conan Doyle abandoned Catholicism early on and later devoted himself to spiritualism. Looking at the composers mentioned in the Sherlock Holmes stories, many are Protestants, four of whom, Mendelssohn, Meyerbeer, Offenbach, and Wagner, wrote music using Martin Luther's *Ein' feste Burg ist unser Gott*. He also portrays the Huguenots who, after being chased out of France, resettled in the United States in *The Refugees: A Tale of Two Continents*. Doyle had a favorable view of Protestantism, especially the Lutheran and Huguenot varieties.

*Key words:* Arthur Conan Doyle (アーサー・コナン・ドイル), religion (宗教), Catholicism (カトリシズム), Protestant composers (プロテスタントの作曲家), Sherlock Holmes stories (シャーロック・ホームズ物語), Martin Luther (マルティン・ルター), Huguenot (ユグノー)

## 1

作家アーサー・コナン・ドイルの宗教観を、彼が書いた60篇のシャーロック・ホームズ物語を通じて考察してみたい。

コナン・ドイル(以下、ドイルと略記)は1859年5月22日にスコットランドのエジンバラで、アイルランド系の家に生まれ、同地のBroughtonにあるSt. Mary's Cathedralでカトリックの幼時洗礼を受けて<sup>1</sup>、Ignatiusの洗礼名を持った。ランカシャーにあるホダー校 Hodder Preparatory School に進むが、同校はイエズス会系の寄宿学校であった。さらにストニーハースト・カレッジ Stonyhurst College、最終学年にはオーストリアのフェルトキルヒにあるイエズス会系の学校 Stella Matutina に留学した<sup>2</sup>。つまり一貫してカトリックの環境の中で成長した。

しかし、ストニーハースト・カレッジの教育につ

いては批判的で、ひいてはカトリックに反旗を翻すこととなる。同校の教育が厳格なことが、ドイルにとっては一番受け入れられない点だった。一年上級で、神父となった Thurston のことを「後年心霊問題で私の論敵の一人になる運命にあった<sup>3</sup>」と評したが、それだけが学校嫌い、カトリック嫌いになった原因というわけでもない。

この経緯から、彼がカトリックとは異なる宗教に好意を抱いたことは容易に推測できる。一方、若いころからスピリチュアリズムに肩入れしていることも彼の宗教観を知るうえで無視できない。

ホームズ物語にはしばしば音楽関係の事象が採り入れられている。ドイルと音楽とは一般的には結びつかないが、彼は Stella Matutina 時代には、ブラスバンドでボンバルドンを演奏していた。この楽器には様々な定義がなされているが、チューバあるいはユーフォニウムに近い金管楽器と考えられる。もっとも、残された写真を見ると、今日のチューバと

はずいぶん違い、管が丸く巻かれた中から、まるで大砲が突き出たような形をしている<sup>4</sup>。ドイルの自伝には次のようにある。

期せずして一つの芸を身につけた。というのは学校の楽団で大きなバスを受けもっていた子供が国へ帰ったきり戻ってこなかったのだが、これにはからだの大きい子が必要だった。そこで即座に私が選ばれたわけだ。公開演奏もやった——ローエングリンやタンホイゼルなどなかなかよかった——[中略] ボンバルドンというその楽器は整ったリズムのうちときどきはいるだけだが、まるでカバがステップダンスでもするような音を出した<sup>5</sup>。

ドイルはブラスバンドの中で楽器を演奏していた。しかも「タンホイザー」の中の曲まで演奏した。

ドイルが音楽を聴いた記録はそれほど残っていないわけではないが、多少は存在する。ウィリアム・ギルバート William Schwenck Gilbert (1836-1911) 作詞、アーサー・サリヴァン Arthur Seymour Sullivan (1842-1900) 作曲、つまり、いわゆるギルバート・オサリヴァンのオペレッタ「ペイシェンス」*Patience: or, Bunthorne's Bride* (1881) を、ドイルは1882年頃、当時付き合っていた Elmore Weldon という娘を連れて、たぶんサヴォイ劇場で一緒に鑑賞した経験を持っている<sup>6</sup>。

また、彼は後年『大人になりたくないピーター・パン』*Peter Pan, or The Boy Who Wouldn't Grow Up* (1904) など一連のピーター・パン物の作者として有名な親友ジェイムズ・バリ James M. Barrie (1860-1937) からの懇願を受けて、バリが途中で投げ出したオペレッタ台本 *Jane Annie* (1893) を完成させ、サリヴァンの弟子筋に当たるアーネスト・フォード Ernest Ford (1858-1919) の作曲により公演されたことがあった<sup>7</sup>。

以上のことからすれば、ドイルは音楽と無関係というわけではなかった。

## 2

では、ホームズ物語に作曲家あるいは作品のことがどのように言及されているか。発表順に9項目に

まとめ、一覧してみる。

### ①メンデルスゾーンの歌曲

ホームズの友人ワトスンが、音楽好きで自らヴァイオリンを趣味とするホームズの演奏ぶりを記述している。その中の一節には、「彼がたくさんの曲を、それもむずかしい曲を弾きこなせることは、私の所望に応じてメンデルスゾーンの歌曲やら、その他の愛好曲をいろいろ弾いてくれたから、よくわかっている。」(That he could play pieces, and difficult pieces, I knew well, because at my request he has played me some of Mendelssohn's Lieder, and other favourites.) (『緋色の研究』1887<sup>8</sup>)

メンデルスゾーン Jakob Ludwig Felix Mendelssohn-Bartholdy (1809-1847) はドイツの裕福な銀行家の家に生まれた作曲家であったが、イギリスでの作曲・演奏活動も顕著なものがあつた。スコットランドで得た靈感を序曲「ヘブリディーズ諸島」*Die Hebriden* (1830) (通称「フィンガルの洞窟」)などに表現している。ここで弾かれた曲は「歌の翼に」*Auf Flügeln des Gesanges* (1836) などの可能性もあるが、「Lieder」と書いていることからすると、複数の曲であることになり、ピアノ曲集である「無言歌集」*Lieder ohne Worte* 中の「春の歌」*Frühlingslied* (1842) などのヴァイオリン編曲かもしれない。

### ②ショパンの小品

ホームズがワトスンを、当時名手と謳われた実在の女流ヴァイオリニスト、ノーマン・ネルーダ Wilma Norman-Neruda (1838-1911) のコンサートに誘う場面の一節。なお、以下の③④⑥はホームズがワトスンを誘うパターンである。

「さてと、それじゃ昼食といこうか。そしてそのあとは、ノーマン・ネルーダだ。アタックといい、ボウイングといい、彼女はじつにすばらしい。彼女の弾くあの絶品のショパンの小品、あれは何といったかな?——トラ、ラ、ラ、リラ、リラ、レー——」(What's that little thing of Chopin's she plays so magnificently: Tra-la-la-lira-lira-lay.) (『緋色の研究』1887)

ここで口ずさむショパン Frédéric François

Chopin (1810-1849) がどの曲であるかをめぐってはホームズ物語愛好家が多く推理を働かせている。

### ③サラサーテ

これもまたホームズがワトソンを誘う場面。

「きょうの午後、セント・ジェームズ・ホールでサラサーテの演奏会があるんだ。どうだいワトソン、きみの患者さんは、二、三時間君が留守にするのを大目にみてくれそうかね？」(“Sarasate plays at the St. James’s Hall this afternoon,” he remarked. “What do you think, Watson? Could your patients spare you for a few hours?”) (『赤髪組合』1891)

サラサーテ Pablo de Sarasate (1844-1908) は作曲もしているが、ここではその面はあまり意識されず、もっぱら演奏家として描かれている。したがってこの作曲家については今後の検討からは除外することとする。

### ④「ユグノー教徒」

作品中に作曲家の名前は現れず、作品名「ユグノー教徒」だけが登場する。しかし、それが1836年に完成したマイアベーア Giacomo Meyerbeer (1791-1864) の作品であることは明らかである。

「ここらで一晩ぐらい、もっと楽しいことに気持ちを向けかえることにしよう。『ユグノー教徒』のボックス席が買ってあるんだ (I have a box for *Les Huguenots*). きみ、ド・レシュケ兄弟の歌は聞いたこと、あるかい? (Have you heard the *De Reszkes*?)」 (『バスカヴィル家の犬』1901-1902)

マイアベーアはドイツの作曲家で、パリで活躍した。本名 Jacob Liebmann Beer が示すようにユダヤ系であり、父はメンデルスゾーンと同じく銀行家である。なお、レシュケ兄弟も実在の歌手。二人の兄弟ジャン・ド・レシュケ Jean de Reszke (1850-1925?), エドゥアール・ド・レシュケ Edouard de Reszke (1853-1917) の下の妹ジョセフィーヌ・ド・レシュケ Josephine de Reszke (1855-1891) も歌手であり、3人の「きょうだい」を意味している可能性もある。

### ⑤ラッススのモテット

ワトソンは記述の中で、ホームズがオルランドス・ラッスス (オルランド・ディ・ラッソとも) Orlandus Lassus, Rolando de Lassus または Orlando di Lasso (1532-1594) のモテットについての論文を書いているとしている。

「忘れもしないこの記念すべき一日、彼は終日、論文の執筆に没頭して過ごしたが、このところずっと取り組んでいるその論文のテーマがなにかとえば、これがラッスス作曲のポリフォニー技法によるモテット。」 (I remember that during the whole of that memorable day he lost himself in a monograph which he had undertaken upon the Polyphonic Motets of Lassus.) (『ブルース・パティントン設計書』1908)

ラッススは当時も知られていた作曲家であることは確かであり、この場面をドイツの歴史への深い関心の反映と見ることもできよう。

### ⑥ワーグナーの二幕め

事件が解決したところで、ホームズがワトソンを同じ型で誘う。

「ついでだが、まだ八時前だ。コヴェント・ガーデンで〈ワーグナーの夜〉と称する催しがある！ 急げばまだ二幕めにはまにあうかもしれないよ」 (By the way, it is not eight o’clock, and a Wagner night at Covent Garden! If we hurry, we might be in time for the second act.) (『赤い輪』1911)

ワーグナーが作ったオペラ (歌劇, 楽劇, 舞台神聖祭典劇などを総称して、こう記しておく) であることは確かだが、どの曲か。手掛かりはまったくない。

### ⑦「ホフマンの舟歌」

盗まれた宝石を取り戻すために、ホームズは犯人を自宅に呼び、自らヴァイオリンを奏する間に返すかどうかを考えるようにと伝えて自室に引っ込む。その前の台詞。

「ぼくはバイオリンで〈ホフマンの舟歌〉でもやらせてもらいますよ。五分たったらもどってきますから、そのときに最終回答をお聞かせください。」 (I shall try over the Hoffman Barcarolle upon my violin. In five minutes I shall return for your final

answer.) (「マザリンの宝石」1921)

弾こうとしている「ホフマンの舟歌」は、オッフェンバック Jacques Offenbach (1819-1880) が作ったオペラ「ホフマン物語」*Les Contes d'Hoffmann* (1881, 未完のまま死去。エルネスト・ギロー Ernest Guiraud (1837-1892) 補筆) の中で、ジュリエッタ (ソプラノ) とニクラウス (メゾ・ソプラノ) の二人が歌う人気曲をヴァイオリン用に編曲したものである。ドイツ生まれのオッフェンバックはフランスで活躍した。ヴァイオリンの名手と設定されたホームズが奏でるにはいかにも不似合いの曲である。

ほかに、作曲家が一般に意識されない曲として、次の⑧, ⑨がある。

#### ⑧「コロンビア」万歳と「星条旗」

「そいつは木戸のところにて、木戸にもたれかかっていた。で、なんだか知らんけど、やたら大声をはりあげて、“コロンビーナ”がどうの、“新しくできた旗”がどうのって、わけのわからん歌を歌ってる。」(and a-singin' at the pitch o' his lungs about Columbine's New-fangled Banner, or some such stuff.) (『緋色の研究』1887)

酔っ払った何者かを見つけたランス巡査が歌詞の一部を聞き取った曲は「コロンビア万歳」*Hail Columbia* と「星条旗」*The Star-Spangled Banner* の2曲が一緒になったものだった<sup>9</sup>。「コロンビア万歳」はフィリップ・フィル Philip Phile (c. 1734-1793) が作曲し、ジョセフ・ホプキンソン Joseph Hopkinson (1770-1842) が詞を付けたもので、事実上最初のアメリカ合衆国国歌である。今日では副大統領関係の儀式に使われている<sup>10</sup>。

「星条旗」はジョン・スタフォード・スミス John Stafford Smith (1750-1836) が作曲 (むしろ編曲とも) して「天国のアナクレオンへ」*To Anacreon in Heaven* として流行した曲に、フランシス・スコット・キー Francis Scott Key (1779-1843) が後に詞を付けたもの。今日の国歌であるが、そもそもは酒飲み歌だと言われている。

⑨「メリーよ、私は階段に腰かけている」と「アランの岸辺で」

『恐怖の谷』(1914-1915) の中で、マクマードが二つの曲を歌った。それが「メリーよ、私は階段に腰かけている」*I'm Sitting on the Stile Mary* (アイルランド民謡) と「アランの岸辺で」*On the Banks of Allan Water* (スコットランド民謡) とである。

これらについては「民謡」とされ、作曲家の名が意識されることがほとんどないので、本稿では触れない。

### 3

物語に登場した実在の作曲家の名前あるいはほめかされた作品名を一覧すると、作曲家をカトリックかプロテスタントかと二分した場合、プロテスタントが多いことに気づく。サラサーテを除外すると、ショパンはカトリックである。その葬儀では本人の希望によるとも伝えられるモーツァルトのレクイエムが歌われたのは周知の事実である。

ラッススはカトリック信徒であり、バイエルン宮廷に招かれた。招いたアルブレヒト 5 世 Albrecht V (バイエルン公, 1528-1579) は一時期プロテスタント改革派を容認したものの、後にカトリックの立場に戻った。そこでの楽長ルートヴィヒ・ダーザー Ludwig Daser (1526-1586) はプロテスタントだった。この楽長の地位をラッススはのちに踏襲することになる。しかし、ラッススは生涯カトリックの立場にとどまったとされる<sup>11</sup>。

カトリック教徒としてミサ曲など多数を作曲しているが、今日ではその作曲の本領は宗教曲にあるのではなく、シャンソンやマドリガルにあるとされている。たとえば、井上太郎は次のように書く。

ナポリ弁による愉快なヴィラネッラが書かれたのは、十代の終わりのこの時期で、駄じゃれ、擬音、エロティックな隠喩などをちりばめた多声部の面白さは無類である。[中略] 指揮者リナルト・アレッシンドリーニは、「ラッススはこれらの猥褻で厚かましい詩に作曲することを、どれほど自分自身で楽しんでたことか！」[略] と語っている<sup>12</sup>。

こうした記録を勘案すると、ラッスはいちおうはカトリックと考えられるが、作った曲のタイトルなどからすると、世間で一般的に作られているイメージとは異なり、もっと自由な立場にあった人、世俗的な人物であったのではないか。

メンデルスゾーンがプロテスタントであることには異論の余地がない。交響曲第5番ニ短調 op. 107〈宗教改革〉*Symphonie No. 5 "Reformation"* (1830)を書いたことはその象徴であるし、ヨハン・セバスティアン・バッハ Johan Sebastian Bach (1685-1750)再興のために力を尽くしたことは、バッハがプロテスタントであったことともかかわりがある。

マイアベーアもプロテスタントであった。代表作『ユグノー教徒』が、カトリックに虐殺されたプロテスタント信徒を題材にしていることはそれを表すものである。

オッフエンバックはプロテスタントだったが、1844年にカトリックに転向した。

ワーグナーはプロテスタントかカトリックか曖昧な点がある。ところが、彼は宗教改革の立役者マルティン・ルター Martin Luther (1483-1546)を敬愛しており、ルターを主人公にした台本を遺した。

上記メンデルスゾーン以下4人のうち、ワーグナーを除く3人はユダヤ系である。そしてほぼ同時代の作曲家であったと言ってよい。この点について、本間ひろむは『ユダヤ人とクラシック音楽』の中で、この4人をめぐって、次のような構図を示して見せた。

ワーグナーと同時代のユダヤ人作曲家の名前を思い出してほしい。ジャコモ・マイアベーア、ジャック・オッフエンバック、フェリックス・メンデルスゾーン。ワーグナーの溢れんばかりの才能の前に、彼らは見る影もないはずだ<sup>13</sup>。

ワーグナーとユダヤ系の作曲家との関係は屈折している。ワーグナーの妻コジマの日記から関係のありそうな部分を引いてみる。

リヒャルトはついこの間も、メンデルスゾーンの天才とマイアベーアの成功に対する羨望が、ユダヤ人論文の執筆動機であるという見解をどこかで読ん

だ<sup>14</sup>。

リヒャルト・ワーグナー自身が、悪名高い「音楽におけるユダヤ性」を書いた動機はユダヤ人作曲家への羨望に端を発していると書かれた論文を読んでいたとコジマは記しているのである。

また、この部分に付けられた注によれば、ワーグナーは1840年頃まではマイアベーアの好意と支援に感謝し、その作品を批判するシューマンに「あまり酷評しないでほしい」と手紙を送るほどだったが、42年にはマイアベーアを「狡猾な詐欺師」とまで呼ぶように変貌した<sup>15</sup>という。

一方でワーグナーはマイアベーアと腕を組んでいる夢を見、マイアベーアは彼のために名声への道を教えてくれたのだとコジマに語って<sup>16</sup>もいる。

#### 4

先に挙げたホームズ物語に記述された作曲家には共通する点はないだろうか。単にドイルが思いつままに作曲家の名やその曲名を記したととらえるのではなく、彼の意図に一步踏み込むことはできないだろうか。ことに題材として用いられた作曲家たちの宗派には何らかの傾向が見られないか。

ある作曲家がカトリックかプロテスタントかを作品から判断するとしたら何が指標になりうるか。例えばレクイエムを作曲していれば、あるいは、グレゴリオ聖歌の〈怒りの日〉*Dies irae*を使っていればカトリックであるといった事情が判断材料にはなりそうである。

レクイエムを作った作曲家は多い。しかし、如上の作曲家たちは、ラッスを除いてレクイエムとは無縁のようである。

グレゴリオ聖歌の〈怒りの日〉を採り入れた作曲家も枚挙にいとまがない。ベルリオーズ Louis Hector Berlioz (1803-1869)の「幻想交響曲」*Symphonie fantastique* (1830)、サン＝サーンス Charles Camille Saint-Saëns (1835-1921)の「死の舞踏」*Dans macabre* (1874)は言うまでもない。気づきにくいだが、その交響曲第3番ハ短調 op. 78〈オルガン付き〉*Symphonie No. 3 "Avec orgue"* (1886)でも〈怒りの日〉が聞こえ

てくる。ラフマニノフ Sergei Vasilevich Rachmaninov (1873-1943) は「パガニーニの主題による狂詩曲」*Rapsodie sur un thème de Paganini pour Piano et Orchestre* op. 43 (1934) など多くの作品に採り入れた。ただし、ラフマニノフは正教会だろう。

また、「アヴェ・マリア」を作っていればカトリックだと一般的には言える。ただ、詞にラテン語典礼文や祈禱文を使っていれば、との条件を付けることになる。これはレクイエムでも同じことが言え、したがって、「ドイツ・レクイエム」*Ein deutsches Requiem* op. 45 (1868) のブラームス Johannes Brahms (1833-1897) はカトリックとは言えないし、シューベルト Franz Peter Schubert (1797-1828) はカトリックであろうが、その「アヴェ・マリア」*Ave Maria—Ellens Gesang* 3 op. 52-6 D. 839 の歌詞はウォルター・スコット Walter Scott (1771-1832) の『湖上の美人』*The Lady of the Lake* (1810) のドイツ語訳 *Fräulein von See* から採られたもので、宗教曲ではないから、この曲からだけではカトリックだとは断定できない<sup>17</sup>。

メンデルスゾーンは「三つの教会音楽」*Kirchenmusik* op. 23 (1830) の2曲目に「アヴェ・マリア」を作った。ラテン語祈禱文に曲が付けられているようである。しかし、既述のようにプロテスタントであることは明らかなので、これをもって何か言うことはできない。

マイアベーア、ワーグナー、オッフェンバックにはカトリックだと判断されるような曲を作った形跡は見られないようである。

それ以外で宗派を判断する指標となる曲はないか。その一つとして〈ドレスデン・アーメン〉*Dresden amen* が挙げられるかもしれない。というのも、問題になっている作曲家に関わるからである。

メンデルスゾーンとワーグナーで共通する事項はいろいろあるだろうが、すぐに気づくのは、どちらも〈ドレスデン・アーメン〉を作曲の素材として使っていることだ。メンデルスゾーンは交響曲第5番第I楽章<sup>18</sup>に採り入れている。いっぽうワーグナーの方はさらに有名な舞台神聖祭典劇「パルジファル」*Parsifal* (1882年初演) の〈聖杯の動機〉

*Glasmotiv* に使っていて、前奏曲の中にも出てくる<sup>19</sup>。しかし、ここから何かを抽出することはできそうもない。この曲はプロテスタントでもカトリックでも使われているからである。

## 5

こう考えてきて到達するのは、マルティン・ルターが作曲した「神はわがやぐら」*Ein' feste Burg ist unser Gott* である。これを使っていればプロテスタントだと言えるのではないか。そう思いつくのはメンデルスゾーンからだ。メンデルスゾーンは先にも挙げた交響曲第5番ニ短調 op. 107 〈宗教改革〉の第4楽章の冒頭で登場させ、最後にはこのテーマを高らかに歌い上げている。

ルターの旋律を使った曲として一番有名なのはバッハのカンタータ 80番〈神はわがやぐら〉BWV80 *Ein feste Burg ist unser Gott* である。この曲は1724年10月31日の宗教改革記念日のために作られたものでもある。しかしバッハはホームズ物語には登場しない。

マイアベーアの代表作、オペラ『ユグノー教徒』はまさにユグノー派、つまりフランスにおける改革派を扱っている。ホームズが聴きに行ったことになっているこのオペラの序曲と第5幕のフィナーレの少し前でこの旋律が流れる。

オッフェンバックはなかなか見つからなかったが、片端からその作品を聴いてみたら、オペレッタ「バ・タ・克蘭」<sup>20</sup> *Ba-ta-clan* (1855) にこのメロディーを用いていることが確認できた。シノワズリ・ミュージカルの別名を持つこのオペレッタはどたばた劇で内容はあってないようなものであるが、ルターの曲は、フィナーレの部分で、マイアベーアの「ユグノー教徒」を引用するかのようにして歌われる<sup>21</sup>。マイアベーアをパロディ化しているとも捉えることができ、その意味ではルターへの敬愛の念の表われた曲とまでは言いかねるが、この曲を用いていることは否定できない。

ワーグナーは「皇帝行進曲」*Kaisermarsch* 変ロ長調 WWV104 の中で「神はわがやぐら」を執拗に使っている。1871年に書かれ、初演されたこの曲

は、第二帝政宣言と普仏戦争でのドイツの勝利の時期に書かれた。ルターを使ったのはホーエンツォレルン家 Haus Hohenzollern のプロテスタンティズムの反映であるとされる<sup>22</sup>。

ここに述べてきた5人の作曲家の属性を一覧にしたのが次の表である。メンデルスゾーンとマイアベーアはユダヤ系であり、もともとはユダヤ教からプロテスタントへの改宗者であった。オッフエンバックもユダヤ系で、プロテスタントからカトリックへの改宗者である。ワーグナーは、元来はカトリックのようだが、キリスト教には批判的である。とは言え一方では後に見るようにルターへの敬意が強い。

作曲家名	プロテスタント	ユダヤ系	備考
J. S. バッハ	○	×	
メンデルスゾーン	○	○	
マイアベーア	○	○	
オッフエンバック	△	○	1844年 カトリック改宗
ワーグナー	△	×	ルターに敬意

## 6

ワーグナー夫人コジマの日記、1871年3月13日の項には、「プロテスタントに改宗しようという決意がますます強まる。バイロイトへの移住と同時に実行するつもりだ<sup>23</sup>。」との一節がある。これはあくまでもコジマ夫人のことだが、この時点ではプロテスタントでないことが示されている。

ワーグナーが反ユダヤ主義者であったことはよく知られている。「音楽におけるユダヤ性<sup>24</sup>」の中で、ワーグナーは感情的な筆で、口を極めてユダヤ人を罵倒した。そこではメンデルスゾーンをそれなりに評価しているように見えるものの、名前を出さずに「高名な音楽家」と書くマイアベーアについてはもっとひどい罵詈雑言を浴びせた。最後の一行の「さまよえるユダヤ人の解放とは——亡びゆくことなり。<sup>25</sup>」は冷静さをかなぐり捨てているようにすら見える。

そのワーグナーはルターには深い敬意を示している。夫人コジマの日記には何度もその名が記されて

いるが、そのうちのいくつかを引用する。

いつの間にかルターのことになった。リヒャルトが言うには、できればもう一度ルターを主人公にした喜劇に取り組んでみたい、頭の中では文字通りいつも彼と苦楽を共にして、いろんな点で自分とは同類だと感じている、と<sup>26</sup>。

リヒャルトは彼女 [子ども] たちの大歓声につつまれて《泥棒カササギ》の序曲を弾いた。それからリヒャルトとわたしは、自分たちのためにバッハのコーラル《御言葉を盗むとも》を選んだ。リヒャルトはいつものようにひどく感動して、こう言った。「こういうものを誇れるのは、たいした民族だよ。ユダヤ人は、そこからフランス・オペラを作り上げる。そのことがすべてを物語っている [略] それに、バッハはルターなんだよ。この落ち着きひとつとってみてごらん。バッハは大胆きわまりない音楽を冷静沈着に書いている」<sup>27</sup>。

そこからは、リヒャルトのお気に入りの人物たちの話になった。「これからはもう、アレクサンダー、ベルンハルト・フォン・ヴァイマル、そしてルターとフリードリヒ大王に取り組むしかないと考えていると彼<sup>28</sup>。

リヒャルトは『ベートーヴェンとドイツ国民』と題する自作の論文を話題にしたあと、三篇のヒロイックな喜劇の腹案について語った（ルターの結婚、ベルンハルト・フォン・ヴァイマル、フリードリヒ大王）<sup>29</sup>。

「ルター、グスタフ・アドルフ、フリードリヒ」彼らこそドイツを救った人間たちであり、現在ではこれにビスマルクが加わる<sup>30</sup>。

いずれを見ても、ワーグナーはマルティン・ルターを尊敬しており、彼を主人公とした「ルターの結婚」という喜劇を作ることを考えていた<sup>31</sup>。

先述したように同時代のユダヤ人作曲家がルターの「神はわがやぐら」をそれぞれの作に採り入れたのは自然だが、ワーグナーの方は別の理由があるようにも見える。ルターに関しては、反ユダヤ思想の

点でワーグナーにつながる面があるからである。

ルターは一般的なイメージとは異なり、晩年には過激な反ユダヤ思想を持つに至った。それは「ユダヤ人と彼らの嘘について」*Von den Jüden und jren Lügen* と題する論文にまとめられ、1543年に公表された<sup>32</sup>。「シナゴグの破壊や放火、ユダヤ人の財産や住居の没収、ユダヤ教の聖典の没収、破棄、焼却、収容所への強制移住、強制労働の強要などはすべてマルティン・ルターが勧告したものであった<sup>33</sup>」とまで言われる。書き残したのを見る限り、ルターはワーグナーよりもずっとナチスに近い思想を持っていたように見えると言わねばならない<sup>34</sup>。ワーグナーがルターのこの思想にどの程度影響されたのかは検討を要するが、敬愛の理由の一つがそこにはないとは言えない<sup>35</sup>。

## 7

さて、ルターの「神はわがやぐら」の旋律を採り入れた作曲家は以上に述べてきたほかにも多数ある。作曲家は既述の人たちも含めてプロテスタント信徒が大部分だと言ってよいだろう。

ルター作曲のこのメロディーを使った曲を作った著名な作曲家を、Naxos Music Library で、「われらが神は堅き砦」をキーワード検索した結果を挙げると、ハインリッヒ・シュッツ、ディートリヒ・ブクステフーデ、ゲオルク・フィリップ・テレマン、ヨハン・パッヘルベル、ヨハン・クリストフ・バッハといった16世紀から18世紀にかけての多くの作曲家の名が出てくる<sup>36</sup>。

また、20世紀にもオルガニストのヘルムート・ヴァルヒャやマーティン・ルーサー・キングJr (キング牧師) を含む名が挙がる。リチャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864-1949) の歌劇「平和の日」(別訳「講和記念日」*Friedenstag*) (1938年初演)にも断片的に聞こえてくる<sup>37</sup>。しかしこれらはホームズ物語以後の人たちである。

ドイツの時代に近い19世紀では、オットー・ニコライ Otto Nicolai (1810-1849) の教会祝典序曲「神はわがやぐら」op. 31 *Kirchliche Fest—Overture “Ein feste Burg”*, それをオルガン用にフランツ・

リスト Franz Liszt (1811-1886) が編曲した教会祝典序曲, ヨアヒム・ラフ Joseph Joachim Raff (1822-1882) の序曲 op. 127 *Overture: Ein feste Burg ist unser Gott*, マックス・レーガー Max Reger (1873-1916) の「神はわがやぐら」によるコラール幻想曲 op. 27 *Choralfantasie “Ein’ feste Burg ist unser Gott”* などがある。もっとも、ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) の「神はわがやぐら」WoO 188 *Gott ist eine feste Burg* は、聴いてみるとまったく異なるメロディーである。

以上は曲名に「われらが神は堅き砦」が付いた曲を検索した結果であり、ほとんどが原曲の編曲や変奏曲である。いっぽう、曲名にそれと明示されずにルターを使った曲がまだ他にもあるであろう。

現にこれまでに筆者が気づいたルターを使った作曲家のうち、バッハ以外の曲はそのタイトルを持たない。気づいた限りという限定付きではあるが、自作の中の一部にそれを採り入れた作曲家は、バッハを除いては、メンデルスゾーン、マイアベーア、オッフエンバック、ワーグナーの4名であった。

そこで、最初に述べたホームズ物語に登場している作曲家、もしくはその作曲家の作品と見比べてみると、ショパン、ラッスス以外はぴったりと重なり合うことに気づくであろう。

これは偶然とは言えないのではないか。ショパンはカトリックであることが明確であるし、ラッススも同じことが言える。ただ、ラッススはプロテスタントが根強い地で活躍している。ルターよりは1, 2世代あとではあるが、その影響も考えられる。

## 8

ドイツはカトリックの洗礼を受けたが、のちにそれに批判的になった。その反動でプロテスタントに近づいた。それが意識的にか、無意識にか、物語に反映されたと言えるのではないか。

なかでもユグノー派への態度は格別のものがあるように見える。『バスカヴィル家の犬』でマイアベーアが書いた「ユグノー教徒」をホームズたちが聴きにいく設定になっていることに触れたが、ドイツにはユグノー派との接点があった。まず、ドイツは



このオペラをパリで実見している。

先ほどパリから帰ってきました。[中略] グランドオペラの『ユグノー教徒』、バステューユやグラヴロットの景観などなどを巡りました(1888年11月14日)<sup>38</sup>

さらに、ドイルが1893年に発表した『亡命者：二大陸の物語』*The Refugees: A Tale of Two Continents*は、ルイ14世がナントの勅令を撤回したためにフランスを追われて北アメリカ大陸に亡命するユグノー派の逃避行にともなう冒険がテーマになっている。この作品について、訳者である笹野史隆は、「彼[ドイル]が生まれたエディンバラ市ピカルディー・プレースはユグノーが移住・定着した地であったことから、ユグノーに興味を持ったらしく」云々と書いている<sup>39</sup>。

ドイル自身はこの小説に付けた序文で次のように書いた。

わたしはユグノーの離散と放浪に関して一連の研究を終えてから、このロマンスを書いた。それはフランスにとっては不運だが、世界にとっては恵みとなった不思議な物語である。なぜなら、神の偉大な見えざる手がこの国から最良の種を集めて引き上げ、それを北、東、西へとまき散らしたようだったからである。[中略] 三回、フランスはその最良の部分をつわたしたちに与えた。すなわちノルマン人、ユグノー、フランス革命時の亡命者であり、[中略] その中で最良はユグノーで、この本についてわたしが最も希望することは、この人たちをよく知らない人たちに彼らの長所と苦難をこの本で痛感していただくことである<sup>40</sup>。

翻ってカトリックに対しては、作品中でも「あの精力的なカトリック教徒たち、その心からの敬虔さは、ふまじめさと不道徳が成し得たであろうことよりもっと多くの害を成したのであるが、彼らのあらゆる痕跡を永久にあとにしたと思っても当然だろう<sup>41</sup>」といった厳しい批判が書かれることになる。

『亡命者』についてはユグノー・ソサエティがその第一章を認め、ドイルを晩餐会に招いた。ドイル

は、出席するつもりだと、1893年1月、母に書き送っている<sup>42</sup>。

この作品の後半では新天地でのイロコイ族との闘いが描かれる。「イングランドの植民地は、確かに、宗教の自由を与えてくれるだろうが、妻と自分は、一人の友人も持たず、異なる言語を話す人々の中でよそ者としてどうすればよいのだろうか<sup>43</sup>」と、主人公の苦悩が語られる。しかし、少なくともそこは宗教的には自由の大地だった。

こうしてみると、『緋色の研究』執筆の頃、すなわちホームズ物語で、「コロンビア万歳」や「星条旗」をちらりと見せていた頃からドイルがルター派、中でもフランスの「ユグノー教徒びいき」であった一端がうかがえるのである。

#### 注

- 1 Brian W. Pugh “A Chronology of the life of Sir Arthur Conan Doyle, May 22nd 1859 to July 7th 1930: A detailed account of the life and times of the creator of Sherlock Holmes.” 2018 rev. and expand. ed. MX Pub., 2018 p. 5
- 2 同上 p. 8
- 3 コナン・ドイル 延原謙訳『わが思い出と冒険：コナン・ドイル自伝』新潮社 昭和40.8 新潮文庫 p. 22
- 4 <https://www.arthur-conan-doyle.com/images/6/60/1876-arthur-conan-doyle-feldkirch-bombardon.jpg> 2020. 11. 23 閲覧
- 5 注3文献 p. 25
- 6 ジョン・ディクソン・カー著 大久保康雄訳『コナン・ドイル』早川書房 1980.3 改装版 p. 80 なお、大久保は原文の *Patience* を「忍耐」と訳しているが、これは曲名 *Patience; or, Bunthorne's Bride* のことであり、同時にそれはヒロインの名でもある。
- 7 Gilbert and Sullivan Archive の ページ (<https://www.gsarchive.net/>) 内に Libretto, Vocal Score, MIDI Files などがある。いっぽう、YouTube にも楽器音源があり (<https://www.youtube.com/watch?v=ADYyeCF901E&t=1599s> 2020. 11. 23 閲覧)、また、このオペレッタの一部分については、Rockford

- Operetta Party による演奏も聴ける (<https://www.youtube.com/watch?v=OIB5n6BEnG0> 2020. 11. 23 閲覧)。
- 8 以下のホームズ物語からの原文引用については、*Sherlock Holmes...The Complete Long Stories*, 13<sup>th</sup> impression. 1973, London, John Murray. 及び *Sherlock Holmes...The Complete Short Stories*, 21<sup>st</sup> impression. 1976, London, John Murray. に拠った。翻訳の引用にあたっては、深町眞理子による創元推理文庫版 (2010. 2~2017. 4) を用いる。原文は最低限の引用とした。
- 9 オーウェン・ダドリー・エドワーズ Owen Dudley Edwards が付けたオックスフォード大学版の注によれば、ここで言及されているのは、「コロンビア万歳」と「星条旗」のこと (『シャーロック・ホームズ全集第1巻 緋色の習作』河出書房新社 1997. 9 p. 251)。
- 10 例えば、大統領就任式で副大統領の登場に際してこの曲が流れる。
- 11 『ニューグローヴ世界音楽大事典』第14巻 講談社 1995. 1 p. 164
- 12 井上太郎『レクイエムの歴史』平凡社 1999. 1 p. 79
- 13 本間ひろむ『ユダヤ人とクラシック音楽』光文社 2014. 9 光文社新書 p. 178
- 14 1869年3月30日の日記。三光長治 [ほか] 訳『リヒャルト・ワーグナーの妻 コジマの日記』I 東海大学出版会 2007. 1 p. 139
- 15 同上 p. 141
- 16 同上 1872年9月26日の日記。同上 p. 372
- 17 もっとも現在は一般的にカトリック祈禱文を歌詞として歌うことが多い。
- 18 楽譜 33 小節から。Naxos Music Library で、アルトゥーロ・トスカニーニ指揮 NBC 交響楽団の演奏で1分52秒のあたりから。
- 19 同じく、ハンス・クナッパースブッシュ指揮バイロイト祝祭管弦楽団の演奏で4分50秒のところから。
- 20 1864年にパリに開場した同名の劇場の名はこのオペレッタからとったもの。2015年11月のパリ同時多発テロ事件では、この劇場で89人の観客が死亡した。
- 21 Naxos Music Library で、マルセル・クーロー指揮フィリップ・カイヤール合唱団、パイヤール室内管弦楽団による同曲の8曲目、4分10秒あたりから。また、Wiener Kammeroper (Oct. 2009) の公演による YouTube 動画の19:35からの部分で見られる。 (<https://www.youtube.com/watch?v=aQzk7zOYE28> 2020. 11. 23 閲覧)。
- 22 バリー・ミリントン監修『ヴァーグナー大事典』平凡社 1999. 3 pp. 216-217
- 23 三光長治 [ほか] 訳『リヒャルト・ワーグナーの妻 コジマの日記』2 東海大学出版会 2009. 7 p. 379。なお、当時コジマと同棲していたワーグナーは、「まず彼女を夫と離婚させ、次いで彼女にカトリック信仰を捨てさせようとしていた」という。
- 24 池上純一訳「音楽におけるユダヤ性」『ワーグナー著作集』1 第三文明社 1990. 11 p. 90
- 25 ワーグナーのユダヤ人観については、鈴木淳子『ヴァーグナーと反ユダヤ主義—「未来の芸術作品」と19世紀後半のドイツ精神』アルテスパブリッシング 2011. 6 に詳しい。
- 26 注14 文献 p. 81 1869年2月11日の項
- 27 同上 p. 450 1870年2月20日の項
- 28 同上 p. 461 1870年3月4日の項
- 29 三光長治 [ほか] 訳『リヒャルト・ワーグナーの妻 コジマの日記』2 東海大学出版会 2009. 7 p. 52 1870年7月2日の項
- 30 同上 p. 600 1871年10月20日の項
- 31 この作品は *Luthers Hochzeit* のタイトルで遺されている。Wikipedia の List of works for the stage by Richard Wagner のページの note によれば、“A sketch play/libretto about Martin Luther and his decision to marry Katherina von Bora” と記されている。 ([https://en.wikipedia.org/wiki/List\\_of\\_works\\_for\\_the\\_stage\\_by\\_Richard\\_Wagner](https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_works_for_the_stage_by_Richard_Wagner) 2020. 11. 23 閲覧)
- 32 邦訳があるが未見。ドイツ語原典やその英訳 *The Jews & Their Lies* はインターネット上で見られる。
- 33 大澤武男著『ユダヤ人の教養：グローバリズム教育の三千年』筑摩書房 2013. 8 ちくま新書 p. 72.
- 34 1930年代に「ナチスはドイツの基督教の確立に向けた大衆運動も推し進めた。その際、彼らはルターの著作からの抜粋を多用して反ユダヤ主義を強化、扇動するとともに、ドイツにおける基督教の英雄としてルターを担ぎ上げた。そして、示威活動の

一環として街中を練り歩くと、「神はわがやぐら」を自分たちの行進歌として利用した」（徳善義和『マルティン・ルター—ことばに生きた改革者』岩波書店 2012.6 岩波新書 p.145）

- 35 このことに関しては、例えば、石居正己「ルターにおけるユダヤ人問題」、『ルター研究』第3巻 聖文舎 1987.11 pp.51-71が参考になる。
- 36 Naxos Music Library のデータベースで「われらが神は堅き砦」で検索すると、他に、ルーカス・オジアンダー、シュテファン・マヒュー、ミヒャエル・プレトリウス、ダニエル・マグヌス・グロナウ、メルヒオール・フランク、ヨハネス・クリューガー、クリスティアン・シュプレングラーなどの作曲家がルターのこの曲の編曲をしていることが知られる。
- 37 Naxos Music Library で、ウォルフガング・サヴァリッシュ指揮、バイエルン放送交響楽団盤の23曲 *Hor Kommandant gewaltiger held.*
- 38 コナン・ドイル [著]、ダニエル・スタシャワー、ジョン・レレンバーグ、チャールズ・フォーリー編 日暮雅通訳『コナン・ドイル書簡集』東洋書林、2012.1 p.272
- 39 コナン・ドイル著 笹野史隆訳『亡命者：二大陸の物語』下 に付された「訳者あとがき」エミルオン 2009.2 p.203
- 40 コナン・ドイル著 笹野史隆訳『亡命者：二大陸の物語』上 エミルオン 2008.5 [ページ付けなし]
- 41 注39文献 p.13
- 42 注38文献 p.336
- 43 注39文献 p.54

(なかにし ゆたか 現代教養学科)